足尾銅山鉱毒事件と女性運動

―― 鉱毒地救済婦人会を中心に ――

山　田　知　子

1．視点

本稿は足尾銅山鉱毒事件を鉱毒地救済婦人会という女性運動に光をあて、この「事件」の一断面を明らかにしようとするものである。足尾銅山鉱毒事件は、わが国の公害の原点であり、資本主義創成期における負の遺産として歴史に残る事件である。しかし、これはいっときの「事件」などではない。我が国の資本主義の発達段階の経済優先政策によって引き起こされたいわゆる社会問題である。すなわち、産業化の過程で創出される環境破壊や健康破壊が地域的な貧困や生活問題をもたらすという社会問題であり、いわば地域福祉的問題でもある。足尾鉱毒事件、これは公害によって地域的貧困化・生活問題の創出という福祉的な課題を基底としている。産業化にともなう地域生活変動が地域的貧困と生活破壊をもたらし、そのための社会的対応が地域福祉政策と実践であるとするならば、まさに地域福祉の源流ともいえる「事件」である。

また、この「事件」は社会運動のみならず当事者運動という視点からみても近代史上、きわめて重要な位置を占めている。明治 30（1897）年、銅山の鉱業停止を求め被害農民 2000 人が徒歩で上京し請願したその上京行進は、大衆上京行進の最初ともいわれており、まさに当事者による生活保守のための自然発生的住民運動ととらえると興味深い。

足尾鉱毒事件については、鹿野政直『足尾鉱毒事件研究』、塩田庄平衛『足尾鉱毒問題ならびに田中正造に関する文献目録』をはじめとして、すぐれた歴史的研究がすでにある。とりわけ田中正造に関する研究は内外含め膨大にある。女性に焦点をあてたものとしては、必ずしも多くはないが、井手文子「足尾鉱毒問題と女性」『田中正造とその時代』vol.3、青山館、1982 年、阿部玲子「足尾鉱毒問題と潮田千勢子」『歴史評論』No.347（1979 年、3 月号）という研究がある。また、田村紀雄の「押し出し―農家の女たちの登板」『田中正造をめぐる言論思想』（社会評論社、1998 年）は、川俣事件の「押し出し」における農家の女たちの当事者運動および、男性抜きの女性運動として、そして「下からの運動」について無名の鉱毒地の女性たちのアナーキーに闘う姿をリアルに描いていて、すばらしい研究である。

以上のようにすでにすぐれた研究蓄積がある足尾鉱毒事件である。時代を経て、いまだに、特に 3.11 以後、われわれの問題意識と知的好奇心を刺激続けているのはなぜだろう。人間の健康と安全な生活と環境を考える上でも、欠かせない事件であり、生活を保守するという当事者・住民運動を考える上で、資本主義の発達過程におきた悲劇ととらえても常に日本人の原点でありつづけているからだろう。その時々の危機に対し、現代的意義をもって頭をもたげ、我々が立ち返らなければならない存在として異彩を放っている。

さて、前置きが長くなったが、本稿の目的は、足尾銅山鉱毒事件（以下、鉱毒問題）という社会問題、生活問題に対し、当時の女性たちがどのようにそれを受け止め、女性運動として、被災した鉱毒地の人々の運動と生活支援を展開したかを鉱毒地救済婦人会という側面から明らかにしようとするものである。鉱毒地救済婦人会の動きを日本基督教婦人矯風会（以下、矯風会）の運動との関連で捉え直し、矯風会の運動のなかで鉱毒問題とはなんだったのか、について再整理し、当時の女性運動の一面を明らかにしたいと思うのである。鉱毒地救済婦人会を設立した中心的な女性たちのその多くは、会長の潮田千勢子をはじめとし矯風会のメンバーである。彼女たちは鉱毒問題に、田中正造や木下尚江、島田三郎など、当時の議員やジャーナリストと連携しながら、どう取り組んだのだろうか。矯風会の機関誌『婦人新報』および関連資料（『婦女新聞[1]』）より解き明かしたい。矯風会の先見性と政治性、社会性、そして女性運動と慈善事業の限界性について新たな知見を提供できればと思う。

2．婦人矯風会と慈愛館

ここで改めて矯風会について説明することは本稿の趣旨ではないので簡単に述べる。1874（明治7）年米国基督教婦人矯風会がオハイオ州クリーブランドで発足した。その中心的運動は禁酒運動であった。それを起源とする。1883年に世界基督教婦人矯風会が誕生。

1886（明治19）年12月6日、日本橋教会で「東京婦人矯風会」が発会。初代会頭は矢島楫子[2]、会員56名。1888（明治21）年、機関誌『東京婦人矯風会』が発刊される。1893（明治26）年4月3日、全国組織が成立し、「日本婦人矯風会」と改称、会頭、矢島楫子、本部を東京、千代田区一番町女子学院内に置いた。『婦人矯風雑誌』発刊。1895年、『婦人矯風雑誌』発行停止処分を受け、『婦人新報[3]』と改称して発行。

世界の婦人矯風会は禁酒同盟であったが、日本基督教婦人矯風会の目標は禁酒にとどまることはなく、一夫一婦制、公娼廃止という「人権闘争」、さらに暴力反対、平和運動であり、中心的女性運動団体となった。翌、明治27年、婦人矯風会事業として「慈愛館」を開所。「醜業婦」を教導し養成する会館としての役割をになう目的だった。この「慈愛館」について、中心メンバーである潮田千勢子は「醜業婦と申しましても、一度泥土のなかに陥りました者ばかりでなく、将に醜業婦に陥らんとする貧人を養ひたいと云う目的で建てたので御座いますが、是れはなかなか困難の事で御座いまして……結果をもみませぬ……」[4] と、この事業運営が困難であることを述懐している。この「慈愛館[5]」がのちに鉱毒地被災農民の子女を受け入れることになる。

3．足尾銅山と河川、土壌汚染、農民の疲弊

1877（明治10）年、古河市兵衛が、相馬家と共同で渡良瀬川上流の足尾銅山の経営を開始する。明治12年、夏、栃木県渡良瀬川で、魚類数万尾が原因不明浮上、翌年の夏も同様の事件が発生[6]。1880（明治13）年、1月、渋沢栄一が足尾銅山の共同経営に参加する[7]。同年、栃木県当局は、渡良瀬川の魚類は衛生上害があるとの理由で、捕獲・売買および食用に供することを禁止。

1881（明治14）年頃より、渡良瀬川の鮎や鱒などの魚類、激減する[8]。川の水によって皮膚疾患が生じる場合も見受けられるようになる。1985（明治18）年、栃木県の勧業諮問会で、渡良瀬川の汚染が論議されるも原因は不明。明治20年、6月、栃木県梁田郡の梁田宿外四カ村用掛の記録には、渡良瀬川について「水源の足尾に銅山が開けてより。鉱毒水が流出し、魚類を減らし、絶滅に近くした」[9] とある。

1884・1885（明治17.18）年を境に足尾銅山は急激な進歩を遂げる。足尾銅山の操業には、坑内支柱材等のため大量の木材、また、ボイラーの燃料として、薪、木炭、精錬過程において、コークスの代わりとして木炭が使用されたが、それらは銅山周辺の山林資源でまかなっていた。精錬過程で発生する亜硫酸ガスとその他の有毒ガス、煙塵による山火事の頻発によって周辺の山林は被害を受けていた。銅山の進歩とは裏腹に、渡良瀬川沿岸の農作物が激減、また、銅山周辺の栃木県松木村など5村に、精錬所排出ガスによる農作物被害が発生し 、松木村をのぞく他の村は古河と示談した。

1888（明治21）年、7月、栃木県下都賀郡、安蘇郡、足利郡の渡良瀬川沿岸が洪水にみまわれる。翌1889年も洪水、沿岸八郡が被害。それまでは洪水があると肥沃な土砂を運び、農作物の豊作をもたらしていたが、今回は農作物に深刻なダメージを与える「異質の洪水[10]」だった。1890年8月、1891年9月と毎年洪水にみまわれるようになる。とくに90年の洪水は「古今未曾有の大洪水[11]」であり、栃木、群馬両県の堤防を決壊させた。

この頃から、被害民が動き出す。主なものは次のとおりである。

・1890年4月　足利郡吾妻村、臨時村会を開き、県知事へ上申書提出、12月　吾妻村、村会決議、足尾銅山鉱業停止要求を県当局に提出、10月　安蘇郡植野村有志、8月洪水の泥土分析を栃木県立病院に依頼、12月　栃木県議会、知事に対し、鉱毒除外を求める建議提出

・1891年　12.18　田中正造、足尾鉱毒に関する質問書を衆議院に提出、これに対して、政府は「被害の原因不明につき調査中。鉱業人は独、米より、粉鉱採取器を購入し、鉱毒流出予防準備整えた」と答弁

・1892年　足尾銅山周辺山林の驚くべき荒廃ぶり、濫伐、亜硫酸ガス、野火による裸地化が問題となる。

・1896年　群馬県邑楽郡渡良瀬村早川田雲龍寺に、群馬・栃木両県鉱業停止請願事務所設立

・1897年3.2被害民　第一回押し出し、3.23　第二回押し出し、5.27　明治政府（東京鉱山監督署長）、足尾銅山に対し第三回の鉱毒予防工事命令。目溢しで完成。監督所長はのち

に古河に入社している。

・1898年（明治31）年、9月3日　足尾地方に大雨。足尾銅山沈殿池の一つが決壊し、渡良瀬川大洪水となる。9.26　第三回押し出し

この頃より、足尾銅山、脱硫塔設置で本山に精錬が集中し、松木地区への亜硫酸ガス濃密になる。松木村民、現金収入途絶え、食物なし。健康被害多発

正造のいらだちは最高潮に達す。

・1900（明治33）年　2月8、9日、足尾鉱毒被害民、請願書を貴衆両院、内閣総理大臣、農務省等に提出、2月9～　田中正造は衆議院で鉱毒問題に対し何らの対策をとらない政府を批判する質問演説、2月13日川俣事件、木下尚江毎日新聞に『足尾鉱毒問題』掲載（2月26日～3月17日、6月に単行本発刊）、7月21日東京、神田青年館で足尾銅山鉱毒調査有志会設立される。

・1901（明治34）年、5月21日、鉱毒調査有志会、足尾鉱毒被害地の死亡調査を決定、内村鑑三ら現地調査、10月23日田中正造代議士辞任、11月20日鉱毒調査有志会「足尾銅山鉱毒調査報告第一回」発表される。12月10日　田中正造、天皇直訴。

1900年代に入る前までは、鉱毒事件はまだ、一地方の小さな鉱毒問題にすぎなかった。20世紀にはいって、ジャーナリズム、女性団体などと結びつきながら、全国化していった。

4．婦人矯風会と鉱毒問題

1）木下尚江と大関和

毎日新聞は、木下尚江が「足尾鉱毒問題」を連載するなど徹底的にキャンペーンをはった。矯風会と木下尚江・島田三郎そして田中正造を結ぶ線はどのように形成されていったのか。それは、当時の廃娼運動によってもたらされた。木下尚江は、故郷長野で受洗していて、すでに廃娼運動や禁酒運動に関わっていた。1897（明治30）年、日本最初の普選運動をおこし入獄、出獄後、明治32年毎日新聞社[12]に青年問題、婦人問題、労働者問題をモットーとする島田三郎主宰の毎日新聞に強く惹かれ入社している。島田三郎も植村正久によってキリスト教に入信しキリスト者であった。

木下は入獄する前、新潟の高田教会で開催された廃娼演説会に登壇したことがあった。そのとき、高田女学校の生徒取締として勤務していた大関和と出会う。大関は、矯風会ゆかりの桜井女学校の看護学校出身で矯風会の会員でもあり、のちの東京看護婦会会頭である。大関は木下と出会った直後『女学雑誌』に「男女同権のさきがけにまず廃娼を」と題する投稿をする。それを読んだ木下は、感激し、すぐさま大関に激励の手紙を書いたのだった。「基督教主義の学校で西欧先進国のデモクラシーにもとづく教育を受けても、卒業後は嫁して家父長的家族主義の中に埋没してしまうのが大半であるのに、あなたは社会の一線で世の中の改良のために活躍する新しい生き方をしていて、未来の女性の姿だ[13]」という賛辞の手紙だった。大関は夫と離婚、当時は30歳を過ぎていて、子どもを母親に任せ看護の道を一筋に歩んでいた頃であった。木下より11歳年上だった。その後、大関は木下が入獄中になんども差し入れをし、二人の間には特別な感情が芽生えていたといわれている。が、結局、大関は周囲の反対にもあい、木下との恋愛を成就させることはなかった。木下に自らの看護学校の後輩で弟子でもある和賀操（矯風会の会員）を紹介し、木下は操と結婚した。木下と矯風会は個人的に強いネットワークを持っていたのである。島田三郎のその妻信子もまた矯風会の主要メンバーであった。

この頃、木下はまだ若く、無名ではあったが、廃娼を唱え、廃娼学術演説会で「公娼主義の迷信を破る」と題する演説を行うなど熱心に全国を遊説している。『廃娼之急務』を執筆（発行は1900年10月12日、博文社、島田三郎の序）している。さらにまた、木下は、1900年の3月2日、吉原から逃げ、毎日新聞者に助けを求めてきた「津田きみ」という少女を木下らが楼主と談判し、自由の身にした。「きみ」はしばらく潮田千勢子のもとで暮らし、翌年6月に矯風会「慈愛館」に入った。その後、横浜の共立女学校に学んだとある[14]。

2）木下尚江の鉱毒問題への傾倒

廃娼運動に心血を注いでいた木下であったが、1900（明治33）年、2月島田三郎の命により、『毎日新聞』特派員として足尾鉱毒問題調査のため、現地に赴く。彼は、啓蒙主義教育の強烈な刺激を受けて育ったので、当初は、足尾鉱毒問題を日本の工業化にとっての障碍、「我が国運の障碍」と捉えていた。当時、田中正造が足尾銅山の鉱業停止を叫んでいたが、木下は操業停止など論外と考えていた。なぜなら、足尾銅山によって、生命を支える者は「所員と坑夫と其の家族と合わせて一万六千五百」にのぼり、「鉱業停止は直に被害の荒地をして、蜜流れ乳滴ることを得せ

しむるに非ずして、偶々一方山中に於いて、男女老若一万六千の飢餓を生み出すに過ぎず」という現実があると考えたのである。しかし、現地調査の結果、その惨状を実視し、被害民や田中正造が鉱業停止を叫ぶのは無理がないと考えるようになる[15]。木下尚江は現地ルポを毎日新聞に『足尾鉱毒問題』（2月26日号～3月17日号）として報告する。それをまとめ6月に毎日新聞社から発行する。

3）矯風会の廃娼運動の全国展開

一方、矯風会では、1889（明治22）年、6月27日、一夫一婦の建白書を元老院へ提出する[16]。1889年11月28日、群馬県議会が廃娼建議を可決するが、それに呼応して東京でも廃娼演説会が開かれる。同年12月9日、矯風会廃娼演説会で、植木枝盛、島田三郎が、1890（明治23）年、3月8日には、島田三郎、巌本善治が講演している。3月21日、前橋の青年廃娼協議会結成会に潮田千勢子と佐々城豊寿[17]が出席。5月24日には全国廃娼同盟会が発足、矯風会も加盟団体となる。同年、集会及び政社法について、首相と司法相に建議提出。衆議院規則案の改正要望し、「婦人の傍聴禁止削除に成功」している。さらに、貴衆両院議員に公娼制度廃止を請願、各大臣に廃娼の決議書を呈送するなど、政治的な運動を精力的に展開する。

1892（明治25）年、一夫一婦の請願（刑法民法改正）と在外売淫婦取締法制定を貴衆両院と政府に提出する。これは毎年続行されるがなかなかとりあげられなかったが、矯風会は廃娼運動とそれに連なる一夫一婦の請願を粘り強く展開していた。特筆すべきことは、運動のひろがり、会員の全国化である。本拠地東京のみならず、地方に支部をもちそこを拠点に全国に矯風会の運動は広がりを持つことになるのである。

明治34年の『婦人新報』第49号に掲載された当時の全国の矯風会一覧（明治34年4月調査）によれば、明治26年名古屋、27年横浜、28年は外国人、29年東北宮城、30年北海道函館、室蘭、関西神戸……31年は上毛基督教矯風会[18]が発会、この年は実に14箇所、32年5箇所、33年7箇所と全国に矯風会の運動の拠点が広がっている。さらに長崎、長府、京都同志社、堺、加えて、新設の北海道旭川と京都矯風会などの名がある。矯風会は全国の教会を基盤としつつ2000人をはるかに超える正会員と特別会員（男性）によって支えられた巨大なキリスト教に基づく女性のための女性による全国的組織だったことがわかる。

5．鉱毒地救済婦人会の設立

1）田中正造の矯風会への接近

1900（明治33）年、11月1日、鉱毒調査有志会の第一回の演説会会合が神田青年会館で開催され、木下尚江、島田三郎、内村鑑三、安部磯雄、巌本善治が登壇する。矯風会からは潮田が出席。彼女は鉱毒問題に敏感に反応した。

11月16日、矯風会有志（矢島、潮田、島田信子、松本英子）が被災地へ現地視察に赴く。正造と木下の案内で海老瀬村、谷中村を訪れ、惨状を目の当たりにし、救済婦人会の組織化が帰りの車中でまとまった。しかし、なぜ、正造は矯風会を巻き込んだのだろう。もちろん、木下尚江や島田三郎から矯風会の情報は十分入っていた。第一に矯風会は毎月25日に機関誌を発行していて、その情報発信力に期待した。第二に矯風会の組織力を基盤に足尾鉱毒の問題を全国に訴えたいと企図したとみることができよう。

矯風会の情報発信力を巧みに利用した例として、1901（明治34）年4月25日発行の『婦人新報』vol.48の表紙裏の広告文がはじめて掲載される。『足尾鑛毒惨状画報』三好退蔵君題字、島田三郎君序論、津田仙君寫眞、松本隆海君編纂（発賣所　青年同志鉱毒調査會　芝区二丁目九番地）。広告文は次のとおり。

「足尾鑛毒事件は問題として世に現れすでに十有余年その被害は年一年に惨を加ふれそれ未だ解釋決定を下されず然れども今や人道問題権利問題社会問題として同情の聲四方に起こらんと此の時に際して世の被害惨状の実地を視察し能わざる人々に対して其の被害幾分の状態を紹介せんと欲して本書を編纂せしものにして挿む處の寫眞画四十余箇に詳細なる説明を加へたれば所謂百聞は一見に若かずの弁に背かざらん。婦人新報事務所にて御取次するも苦しからず。」

この号にはじめて田中正造が登場し、「矯風會員其他に対する希望」（『婦人新報』明治34年4月25日発行）という4月2日に青年会館で行われた正造の演説が掲載されている。以下はその演説の概略である。

- 明治30年の春に会頭矢島楫子に（民法改正の件で）矯風会の会合に出席を要請されたが、鉱毒問題があり、出来なかった。
- 明治33年11月に私が前橋に行ったときに、矯風会会員の松本忠次氏の訪問を受け、日本婦人矯風会は、一夫一婦制度に関して、民法刑法改正の件と在外売淫婦取締法制定の件で十余年来毎年国会に

請願しているが、今年も両院に請願するので、衆議院の提出者の一人になってくれと依頼された。

・私は若い自分であったら、このような請願の提出者の資格があるかないか危ぶまれるような次第であるが、今は、先年来禁酒禁煙を実行しているし、これらの制度はりっぱなことなので、松本氏の御依頼に喜んで賛成を致し、直ちに承諾書を認め、捺印を致して、同氏にお渡しをした。

・本日、矯風会の会員のみなさんに請願したいことが二つある。第一は、婦人新報を売り広めるようお願いしたい。第二は、島田三郎君は二十年来、私は十余年来尽力していているが、医学博士、三宅秀君も衛生問題として栃木県に来て２回ほど演説をしてくれたが、どうかこの被害民の実況を視察してほしい。「賢明なる矯風会会員はじめご来会の諸君も然るべき方法を立てて、被害民を御救済くださることを望みます。」

・実例をあげると、婦人が他に嫁して子どもができますが、鉱毒によって乳がでず、子どもが餓死するというようなことがある。鉱毒で死んだものは１年1064人になる。

・被害の実況について、このほど、青年諸君が一冊の書籍を造りました。ご覧くだされ。

・救済について、政府に請願を致そうとして出京致そうとしても、その意を達することができない。

・多数の被害民のなかに、私共のように、他人の利益のため、自分は大いなる害を受け、子どもは死に、妻は飢え、田畑は荒れる、これでは、憲法も政府も何処にあるのか。一方は普通人民以上の地位を得ながら、他は、獄中に呻吟せねばならぬというようなことはいかがか。帝国のため、一大憂患ではないか。

これを読むと、正造は矯風会の一夫一婦制や禁酒運動に興味があったというより、矯風会という女性団体を鉱毒問題に巻き込み、世論を高揚させようと考えたのではないかと思われる。それまでの男性中心の社会運動にはない女性団体ならではの影響力を考慮したものだったに違いない[19]。正造の思惑通り、矯風会の全国に張り巡らされた地方支部によって、鉱毒問題は全国の注目を浴びることとなったのである。

矯風会側はどうかというと明治30年ごろから議員である正造を通して、議会に働きかけ、影響力をもとうと企図したようである。正造の鉱毒問題とともに自分たちの団体のモットーである一夫一婦制や廃娼、禁酒運動を同時に広めたいと考えた。当初は、ある意味で駆け引きだったのかもしれない。

この辺のことを、1900年の毎日新聞の動きと連動させ考察すると、興味深い。島田三郎は、11月9日、現地に赴き田中正造の案内で被災地を実地見聞していた。人道上黙過できないと、すぐに木下に相談し、被災民支援の協力を願った。島田と木下が世論喚起を引き起こすための仕掛けとして選んだのが、矯風会だった。島田は「（被災民支援）この事業は、従来の鉱毒運動とはまったく別箇の新運動として、同情ある婦人の手にゆだねたい。婦人の同胞愛に信頼したい」と考え、木下は「先夜の鉱毒演説会にも、婦人矯風会の人たちが傍聴に来ていて、たいへん感動して聴いていたようです。ひとつあの人たちに乗り出してもらったらいかがですか」といい、早速、矯風会の潮田と交渉をしたのだという[20]。

廃娼運動を展開する一女性団体がその中心を担ったことはどのような意味があったのだろうか。この足尾鉱毒問題が全国に広がりをもつためには必要だった。全国の教会を基盤とした女性団体、しかも数々の請願運動を試み、きわめて政治的な動きができる稀な存在、『婦人新報』という機関誌をもっていて毎月発行されている。被災民の窮状を訴え、現地の子どもや女性たちの悲惨な状況を世に訴えるには格好のツールだった。

こうして、田中正造、島田三郎、木下尚江、そして矯風会がプライベートな関係が社会的に結びつき、鉱毒地救済の全国展開がはじまったのである。

２）鉱毒地訪問から鉱毒地救済婦人会の発足へ

すでに述べたが、明治34年11月1日、潮田千勢子らは、毎日新聞社の鉱毒演説会を傍聴する。被災地を実視しなければと思い立ち、その後、有志婦人数名で、11月16日、初めて被害激甚地海老瀬村に赴く[21]。被災地の惨状をみて、被害甚大であることを知り、帰りの車中で鉱毒地救済婦人会を組織することを決めたという。この時のルポルタージュを潮田千勢子は「鉱毒被害地渡良瀬の民」『婦女新聞』vol.81・82（明治34年11月25日・12月2日発行）と2号にわたって報告している。また、『婦人新報』vol.56号（明治34年12月25日発行）にも「鉱毒地訪問記」というタイトルでほぼ同様の内容で寄稿している。ルポの概要は次のとおりである。

貧民の家を20軒ほど訪問したが、いづれも事情は少し変わっているが、皆、鉱毒被害のため（生活）困難におちいり、

食物を得る道もなく、瀕死の状態にあること、婦人は眼病か胃病かであること、東京の貧民にくらべようもないくらい憐れな境遇である。……さらに、学校を参観したが、壁が落ち軒が傾いている荒屋で、教員一人に生徒 80 人、そのうち女子は 3 人であった。学童は 300 名余いるが、鉱毒のため糊口の道を失って、教育のことなど顧みるいとまがないとのことである。せめてこれらの子女を東京にともなって教育を受けさせたいと思って、親に勧めたが、「質撲なる田舎人の性として何とも決し兼ねた有様であるから有志者に委任してきた。……このような悲惨の形跡が東京を距る僅か二十里ばかりのところにあるのを、なぜ我々は今まで知らなかったのであるか、世の慈善家は何故に顧みなかったのであるか、田中翁が十年一日の如く狂奔するのもむりではないと、実に深く感じた次第である。

潮田は、女性ならではの視点から、その生活に着目し、健康状態にも目を配っている。また、学童 300 余名のうち女子がたった 3 名であることに驚き、東京に連れていき教育を受けさせたいと思って親に勧めている。女性の生活や女子教育に着目できるのは、矯風会の潮田ら以外にはいない着想であろう。そして、東京から二十里しか離れていないところにこのような悲惨な地域があり、苦しむ被災民がいることをなぜ気がつかなかったのだろうと悔いている。貧民としての女性、子どもに敏感に反応していること、そして東京の貧民とくらべようもなく憐れな境遇と、東京の貧民との比較をしていることは注目すべきことである。貧しさに着目しているが、「醜業婦」は貧しさから発生することを痛いほど知っている潮田ならではのセンスが光る。

『婦女新聞』82 号の巻頭では、潮田のルポに先立って、「鉱毒問題と婦人」と称する記事が掲載されている。「鉱毒問題は、婦人の援助を俟つ刻下の急問題であり、これは一地方の問題ではなく、30 万の民が飢餓に泣き五百町歩の肥田は荒蕪に帰せんとしている。今の慈善家はあまりに浅見、現金的である。目前には同情するが、5 年 10 年 20 年に渉って無形的漸進的な千百の苦難に翻弄されているものにはあわれを感じないのか」と、鉱毒問題に女性たちがめざめ、輿論を高揚し、父、夫、兄弟という男性を巻き込みつつ、問題解決させよと、早急な対応を求めている。

3）破竹の演説会と世論の沸騰

11 月 29 日神田青年会館に於いて窮民救助演説会が矯風会の発起でおこなわれた。司会は、矢島楫子、演説者は巖本善治、安部磯雄、木下尚江、島田三郎、潮田千勢子であった。渡良瀬川沿岸の被害民の救済を訴え、鉱毒地救済婦人会の設立が発表されたのである。（潮田千勢子「鉱毒地救済婦人会の来歴」[22]）この演説会は予想以上の成功をおさめた。「満場昂奮の渦と化し百円余の寄付金が集まった。木下はこのときの模様を後に「私は自分で驚愕した程……『霊的』の集会」と回想している[23]。

11 月 30 日、古河市兵衛夫人為子、東京の神田橋下で水死体にて発見される。投身自殺といわれる。為子は市兵衛の蓄妾に苦しみ精神を病んでいたとも言われる。矯風会の一夫一婦制に共感していたともいわれ、矯風会の演説会に侍女を潜り込ませていた。この事件は新聞各紙がとりあげ、センセーショナルな話題を呼び、市兵衛個人の蓄妾に対する道徳上の非難は、やがて、人々によって鉱毒事件と結びつけて考えられるようになったのである[24]。

11 月 22 日から毎日新聞の松本英子が,「鉱毒地の惨状」を連載（明治 35 年 3 月 23 日まで）。足尾鉱毒被害民を訪問した＜救済婦人会＞の婦人の筆（みどり子）とし、被害民と被害地の疲弊した実情を絵入りで詳細に描写した。これは、1902（明治 35）年 4 月、松本英子の『鉱毒地の惨状』として一冊にまとめ刊行される。

こうして、鉱毒地救済婦人会は 1901（明治 34）年、12 月 6 日発足した。会長が潮田、その他の発起人は次の女性たちである。朽木よし子[25] 山脇房子[26] 矢島楫子[27] 松本英子[28] 木脇その子　木下操子[29]　三輪田真佐子[30] 島田信子[31]。

12 月 7 日に行われた矯風会年会の席上で、潮田は会頭を辞して、貧民の友として働きたしという意向を示したものの、再選される。このとき潮田は、廃娼運動、一夫一婦制の確立という矯風会の運動目標と同時に、鉱毒地の貧民救済のために尽力したいという熱い思いがあった。

12 月 10 日、田中正造、鉱毒事件で明治天皇へ直訴。

正造の直訴もあり、また、鉱毒地救済婦人会の結成により、世論は沸騰した。鉱毒地救済婦人会はその後、連日演説会を開催し、キリスト教女性団体の運動として、それまでの政治家や限定的な有志の運動とは異なる層のこの問題への関心の掘り起こしに貢献した。女性による被災地支援の喚起という戦略は、慈善、憐憫の情といった世論を形成する新たな層を呼び覚ましたのである。女性たちや当時東京帝国大学学生であった河上肇[32] をはじめとする若者層に働きかけ、そのことによって鉱毒問題を単に一地方の鉱毒問題に終わら

せることなく世紀の公害問題として歴史の中に立ち上がらせることとなった。これを契機に義捐金、窮民救助、被害地病人の上京治療、被害地の少女の教育などが始まった。矯風会は被災地の婦女子支援として、生活困難婦女子を大久保の矯風会の慈善事業の拠点である慈愛館に引き取っている。『婦女新聞』vol.83（明治34年12月9日発行）で「過日、鉱毒地救済婦人会は、14名の女児を引き受け、目下、婦人矯風会にて設立せる慈愛館にて救養せる由なるが、可憐なる児童は尚数多被災地にて飢餓に泣き、同会の経費不足にてこの上の収容に躊躇せる様子、地方慈善家、同会に金員または、物品を寄贈せられたき方は毎日新聞社松本えい子宛まで」と支援を訴えている。また、現地谷中村に授産場を作り、被災地の就労の場[33]を提供している。

キリスト教系の運動と競合するように仏教界も支援活動を展開する。臨済・真言・曹洞の三宗派は1901年11月上旬に合同支援活動を行うため、委員を選定、被害地視察している。臨済宗建長寺派は11月18日、被害地末寺に対し、支援のために寺院使用を図る訓令を出している。年末には、本願寺から医師、看護婦が被害地に派遣されている。西本願寺別院は救助品を1902年1月に送付、救助の金品を被害民に分配しながら法話会を開催するという運動スタイルをとった。地域密着と統制のとれた行動、豊かな財政力があったといわれる[34]。

また、前述の河上肇の例のみならず、学生による被害地大挙視察もはじまるが、これは鉱毒地救済婦人会が仕掛けたものである。1901年12月27日、集合場所の上野駅構内は学生であふれ、千百四人の大視察団となったという。30日に行われた報告会は神田青年会館を熱気に包むものだった。1902年元旦からはじめられた学生による路傍演説は、演説会とはことなり不特定多数の広範な対象に働きかけることを可能にしたのだった[35]。

潮田は、1902年1月5日から田村直臣、木下尚江と共に京阪地方に遊説に出かけ、15日に帰京している。「鉱毒救済問題彙報」『婦人新報』vol.58（ 明治35年2月25日発行）によって、その遊説の一端を見てみよう。

- 1月6日夜　大津市坂本町交道館（男女500名、義捐金10余円）
- 1月8日午後2時　京都四条教会（開会前よりすでに満員、講壇の上まで聴衆が溢れた。義捐金70余円、山のような衣類の寄付あり。同志社女学校の生徒3名は、2・3箇月被害地に行って、慰籍したいと申し出た。寄付品は四条教会および洛陽教会事務室に堆積せり）
- 1月10日　午後7時―11時　神戸教会（600余名、寄付金　60余円、衣類、十数点）
- 1月11日　午後1時、大阪土佐堀青年会館（開会前に満員、700名以上、毒地の惨状を見るが如く説くと、老人が突如演壇の前にきて外套、羽織、襟巻き、手当たりしだいに壇上に投じた。壇上に義捐するものたちまち二十余名、50余円）
- 1月11日　夜　　京都洛陽教会（尋常中学生らの熱心な計画によって開催された。600余名、大半は学生男女。20円の義捐金、学生男女から衣類が寄贈）

6．鉱毒地救済婦人会の政治運動への旋回

1902年1月17日『毎日新聞』に、鉱毒地救済婦人会の名で、「与古河市兵衛」「貴衆両院議員諸君に檄す」を掲載、公開質問状を突きつけた。まさに、これは、鉱毒問題が女性運動によって全国的な政治運動の色彩をより濃くしていく布石となった。単なる女性による一夫一婦制や廃娼運動といった家族制度や女性問題に特化した運動ではなく、矯風会が鉱毒地救済婦人会を通して、政治問題に以前よりもっと接近し、運動として全国の人々に影響力をもつ実体あるものに旋回した瞬間だった。檄文中に「……起てよ我同胞姉妹君等にして若鉱毒の如何に激甚なるを知らず被害地の如何に惨状なるかを視ざる人あらば一度足を被害地に容れて其荒漠たる原野と変ぜしその名状すべからざる人民の惨状を実視せよ……」とのフレーズがある。一度足を被害地に容れよという現場主義は社会福祉（慈善事業、社会事業）の起点である。現場から立ち上げた社会問題を認識し、政治運動とつらなり一般の人に訴え社会を変えていくという、現代的解釈をすれば社会事業、社会改良への道筋を示すものだった。しかし、この檄文により、潮田と松本英子は京橋警察署から召喚を受け、さらに、政府系の男性ジャーナリストからの女性運動に対し誹謗中傷という反作用もあった。松本は動揺し、1902（明治35）年渡米、結婚、その後帰国することはなかった。また、1903年7月、潮田の病没により活動は小規模化していった[36]。富国強兵、殖産興業の体制のなかで足尾銅山を経営する古河は政治勢力と縁戚をむすびながらさらに巨大化し、基幹産業として成長、操業を停止することはなかった。足尾

鉱毒問題は治水問題にすりかえられていき，次第に矯風会の女性たちも遠のいていったのだった。

7．小括

鉱毒問題における鉱毒地救済婦人会の果たした役割は大きい。それは矯風会のメンバーの存在とりわけ潮田、矢島なくして成り立たなかった。ここで、鉱毒問題における女性運動団体矯風会の意義について、まとめておきたい。

① 矯風会は鉱毒地救済婦人会によって、新たな運動、すなわち、家制度や醜業婦の問題から一歩踏み出し、男性中心の社会運動と連帯したことである。

② 鉱毒地救済のいわば被災地支援として慈愛館と授産事業を展開したことは、単なる社会運動ではなく、慈善事業（福祉的実践）をともなう運動であったということである。

③ 鉱毒地の地域的貧困を東京と比較しながら、東京とは異なる地方の貧困問題、鉱毒問題（公害問題）として捉えていたことである。

④ 地域的貧困が女性の身売りを生み出していること、すなわち、貧困が性の搾取を生み出すことを認識し、解決の方策を講じようとしたことである。

現に被害地で社会の底辺で産業化の影で生活を破壊され、苦しんでいる貧しい人々、女性と子どもに着目し、接近し、その生活支援と教育、自立への手助けを女性運動として社会運動と連動させながら実践的救済を試みたこと、それは、単なる憐憫の情にほだされただけの慈善事業ではなく、知らず知らずのうちに社会事業、社会改良の目をもった運動だったとも言え、きわめてソーシャルで斬新なセンスをもったものであった。彼女らの社会改良の目は、貧困が女性を「醜業婦」へと向かわせ、それを是認し前提とする男性支配の社会システムへの批判へとつながっていた。打開のためには一夫一婦制の確立と廃娼、加えて、女性の経済的自立によって男性支配の社会システムを変化させることが必要であるという意識にめざめていたことを物語っていて評価できる。

矯風会のメンバー全員がこのいわばジェンダーの視点をもっていたとはいえない。しかし、主要メンバーたち、とくに潮田 、矢島たちは、それまでの来歴を見ても死別、離別職業女性として女性の地位向上は経済的自立によってもたらされ、それが性の自立をもたらし、平等な夫婦、男女関係を形成するものであることを深く理解していたといえよう。

さらに、鉱毒地救済としてではなく、それは鉱毒によってもたらされた地域的な貧困問題であり、その貧しさが女性を「転落」させていくことも強く認識していた。鉱毒地救済は地域的貧困の解決、女性の貧困化防止、地位向上に鮮烈につらなる運動であったところに着目すべきであろう。1902 年 6 月 25 日発行の『婦人新報』（p.12）掲載された「慈愛館委員会報告」に次のような記述がある。「鉱毒被害地救済委員等が被害地巡回の際、その地方に 15 歳以上の娘らはすでにその両親等のために売られて一人もいなくなっていて、残っているのは少女のみだったが彼らもまた（15 歳になれば）同様の運命に遭遇すべき恐れがあるので慈愛館に托した」とある。地域的被災による生活破壊が地域的貧困を生み、それが娘の身売りを常習化させていること、鉱毒被災地救済は地域福祉実践であり、女性福祉のための実践にほかならなかったのである。

政治社会問題に強い興味を示し実践的に運動を展開した矯風会であったが、しかし、下からの運動として、農民や「醜業婦」にとことん接近することができたかというとそうではない、という批判もある[37]。徹底した当事者に立つ運動にはなりえなかった。彼女らが夫の暴力や離別、死別女性として苦労していたとはえ、そして没落士族とはいえ、とにかく、高度な教育をうけ、都会的な生活スタイルを身に付けた女性たちだったのであり、また、矯風会メンバーには、貴族の子女も多く含まれていて、当時の徹底的に異なる階層や地位にある農民や低所得層や「醜業婦」にならざるを得ない女性たちのおかれた状況を真に理解できたか、というと必ずしもそうではないのだろう。

その時代的限定性とともに慈善事業の限界について慈愛館と現地授産場の実態からさらに明らかにする必要があるだろう。女性運動が超えられなかった階層性について、さらに言及すべきであるが、紙面も尽きたので、これについては次号にゆずる。

註

1）1900 年（明治 33 年）5 月 10 日、福島四郎によって東京・神田三崎町で創刊された。当時は、創刊まもないとはいえ、女性のための啓蒙週刊誌として影響力を持ち始めていた。

2）矢島楫子は、徳富蘇峰・徳冨蘆花の叔母。家父長制度のもと、夫の飲酒と暴力に苦しんだ女性である。離婚、その後、既婚男性と恋愛をし、出産シングルマザーとなった。当時の女性としてはきわめてタフな女性であった。矢島楫子の人生についての詳細は、久布白落実『矢島楫子伝』に詳しい。また、三浦綾子『われ弱ければ』（小学館）は小説ではあるが、そのモデルは矢島楫子である。

3）『婦人新報』は現在も発行され続けている。

4）「慈愛館のことに就て」『婦人新報』 18号（明治31年10月20日）

5）DVシェルター「ヘルプ」として今日もその社会的役割をになっている。

6）飯島伸子編著『公害・労災・職業病年表（新版）』すいれん舎　2007年

7）飯島伸子編著『公害・労災・職業病年表（新版）』すいれん舎　2007年

8）飯島伸子編著『公害・労災・職業病年表（新版）』すいれん舎　2007年

9）飯島伸子編著『公害・労災・職業病年表（新版）』すいれん舎　2007年

10）鹿野政直編『足尾鉱毒事件研究』p.31　三一書房、1974年

11）永島与八『鉱毒事件の真相と田中正造翁』1938年

12）現在の毎日新聞とは無関係である。

13）尾辻紀子『近代看護への道―大関和の生涯』新人物往来社、p.170 1996

14）日本キリスト教婦人矯風会編『日本キリスト教婦人矯風会百年史』ドメス出版 1986年 p164

15）木下尚江全集 vol.1 p382、教文館、1990年

16）著名人男女を含めた800余名の署名連印で提出されたが、原本は残っていない。ただ、『女学雑誌』161号に、建白運動の中心人物だった湯浅はつ（矢島楫子の姪）が寄稿している。内容は次のとおり。「儒教は、遺徳の活気なく、且その教へ妾を卑しめす、仏教は女人を以て悪人となし、仏の熱心なる信者の中若しくは高僧の中には数婦を蓄ふるものおおけれは以て頼みとするに足らず、只基督教は一夫一婦を主張するものなれは必す之によらざる可らす。」「民法若しくは婚姻法の如きものにおいて男女の姦通を罰する為・・箇条を設けんことを希望す。」

17）佐々城豊寿は相馬黒光の母方の叔母、黒光の夫の相馬愛蔵は松本中学出身で、木下尚江と同窓であり、親しかった。

18）上毛基督教矯風会の基盤は安中教会や前橋教会などで、安中教会はいうまでもないが、新島襄ゆかりの教会で、初代牧師は海老名弾正。５代目牧師柏木義円は、当時地域ミニコミ誌の先駆けである「上毛教界月報」を発行し、反戦・非戦を終生訴え続けたことでも有名。全国先駆けの群馬の廃娼運動の最初は真下珂十郎による安中遊郭廃止請願だった。真下は安中教会ゆかりの人物であり、湯浅治郎（後に群馬県議会議長・国会議員を歴任、廃娼運動の中心となる）の義兄。ともに新島襄より洗礼を受けた30名の一人。

19）鹿野はこの鉱毒地救済婦人会の運動を、「他の政治運動とはことなった、むしろ今日の住民運動にも通じる性格の一端がうかがえる」と指摘している。鹿野政直編『足尾鉱毒事件研究』p.339 三一書房、1974年

20）大鹿　卓『渡良瀬川―第三篇 第十章』底本：「渡良瀬川」新泉社　1972（昭和47）年

21）大鹿　卓『渡良瀬川―第三篇 第十章』によれば、矯風会から潮田のほかに、会頭の矢島楫子、朽木男爵夫人、それに島田三郎夫人と毎日新聞の婦人記者松本英子を加えて五人、そして正造自身が案内に立った。底本：「渡良瀬川」新泉社　1972（昭和47）年

22）丸岡秀子編『日本婦人問題資料集成』ドメス出版 1976年　P.427

23）山極圭司『木下尚江』p.218、及び鹿野政直編『足尾鉱毒事件研究』p.339

24）鹿野政直編『足尾鉱毒事件研究』p.341　三一書房、1974年

25）朽木男爵の妻

26）1903年東京牛込白金町に山脇女子実修学校（現山脇学園）が創設されると同時に校長となる。のち山脇学園校長

27）女子学院院長、矯風会会頭

28）毎日新聞社記者

29）木下尚江妻

30）三輪田女学校（1902）を開設

31）島田三郎妻

32）当時、東京帝国大学生であった河上肇は明治34年12月20日鉱毒地救済婦人会主催の演説会（本郷中央会堂教会）の田村直臣牧師の演説に感激し、二重外套や羽織を司会者潮田に寄付し、翌日手元の衣類を纏めて行李にいれ、救済会事務所に送り

届けたことはあまりに有名である。

33）経木（西洋婦人帽子の原料で柳の木を削り麦わらのように編む輸出品）製造

34）鹿野政直編『足尾鉱毒事件研究』pp.342 － 343

35）同上　p.343

36）竹見智恵子「時代を描き、時代を越えたルポルタージュ－「鉱毒地の惨状」解題にかえて」『田中正造の世界』1986 年 1 月、谷中村出版社

37）雑録「慈愛館」『六合雑誌』250 号 pp.61-64（明治 34 年 10 月発行）で、慈愛館取材記事が無記名の男性記者によって掲載されているが、慈愛館の職員の接遇について差別的であると批判的に書いている。

主な参考文献

鹿野正直編著『足尾鉱毒事件研究』三一書房、1974 年

阿部玲子「足尾鉱毒問題と潮田千勢子」『歴史評論』No.347、1979 年 3 月号

田村紀雄『渡良瀬の思想史―住民運動の原型と展開』風媒社、1977 年

『田中正造とその時代』青山館　vol.1-4　1981 年 11 月、1982 年春、1982 年秋、1983 年夏

一番ヶ瀬康子「潮田千勢子」『社会事業に生きた女性たち』ドメス出版 1980 年

田村紀雄『明治両毛の山鳴り―民衆言論の社会史』百人社、1981 年

東海林吉郎・菅井益郎『通史足尾鉱毒事件 1877 － 1984』新曜社、1984 年

『田中正造の世界』谷中村出版社、1986 年 1 月

日本キリスト教婦人矯風会編『日本キリスト教婦人矯風会百年史』ドメス出版 1986 年

日本キリスト教婦人矯風会『婦人新報』（復刻版）不二出版、1986 年

田村紀雄編『私にとっての田中正造』総合労働研究所、1987 年

婦女新聞社『婦女新聞』（復刻版）不二出版、1982 年

木下尚江『木下尚江全集』第一巻　教文館　1990 年

田村紀雄・志村章子共編『語りつぐ田中正造―先駆のエコロジスト』社会評論社　1991 年

尾辻紀子『近代看護への道―大関和の生涯』新人物往来社　1996 年

田村紀雄『田中正造をめぐる言論思想―足尾鉱毒問題の情報化プロセス』社会評論社、1998 年

田村紀雄『川俣事件―足尾鉱毒をめぐる渡良瀬沿岸誌』社会評論社　2000 年

飯島伸子編著『公害・労災・職業病年表（新版）』すいれん舎　2007 年

謝辞

本稿執筆に際し、東京経済大学名誉教授の田村紀雄先生より多くのご示唆を頂戴いたしました。心より感謝申し上げます。